

I 学校の概要

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現推進モデル校事業 **高松市立国分寺中学校**

◆生徒数及び教員数

○生徒数

第1学年	第2学年	第3学年	特別支援	全校
6学級 189名	6学級 212名	7学級 227名	4学級 22名	23学級 650

○教員数 41名

◆学校の特徴

本校は、校訓「自主・独立・協同」のもと、学校教育目標を「生徒の生涯を見すえた組織的な教育の展開」と定め、「チーム国中」を合言葉として、教職員が一丸となった教育活動の展開をめざしており、学習指導や生徒指導において、指導に係る教職員間の情報交換を円滑にするとともに、共通理解・共通指導の徹底を図っている。

生徒は、一人ひとり様々な家庭環境・社会環境の中で成長してきており、その保護者を含めて行動様式や価値観が実に多様である。そうしたことが、集団を形成した際に、多様で豊かな集団の形成という長所となって表れる一方で、生徒間でのトラブルに繋がることも少なからずある。過去には、生徒間の繋がりが希薄になり、生徒指導上の問題が多数頭在化したこともあった。現在は、生徒一人ひとりに寄り添う生徒指導の徹底により、多くの生徒が生徒同士及び生徒と教職員間で良好な関係をもつことができおり、授業が好きで、学校が楽しいと感じている。

平成30年度より、本校の課題を総合的に克服するため、人権・同和教育を基盤とした「なかまづくり」の取組のうえに学びの共同体の理念を参考にした『国中協同学習』の実践をスタートさせた。令和2・3年度はコロナ禍のため、事実上一時中断状態になり、十分な協同学習が行えない時期もあったが、令和4年度から学習の在り方を段階的にめざす形に戻し、研究活動を継続している。

II 研究主題等

研究主題

なかまとともに学び合い、未来を拓く生徒の育成 ～国中協同学習を通して～

◆主題設定の理由

本校の生徒の課題である、「主体性」と「なかまづくり」に視点を絞り、課題設定や授業展開により、生徒が自ら学びに向き合うことのできる、しかけのある授業を実践したいと考えた。また、教育活動全体を通し、学び合うなかまづくり「学びのコミュニティづくり」を推進し、ともに未来を拓いていく意識や実践力を身に付けさせたいと考えた。国中協同学習の実践を核にして、育てたいなかま像の育成につなげたい。

◆研究内容及び方法

(1) 国中協同学習の展開

- ・ 「国中学びのルール」を意識した、生徒が主体的に学び合う授業展開の工夫
- ・ 全学年統一の授業に集中できる教室環境づくりと生徒が主役の授業の実践
- ・ 基礎基本の定着と学習意欲の高揚、教科の本質に迫ることのできる学習課題の設定

(2) 研究推進4部会による研究推進

- 道徳部会：全教職員で行う計画的な道徳の実践（学期に1回のローテーション道徳）
- なかまづくり部会：「学びのコミュニティづくり」の基盤づくりとなる特別活動の計画と実践
- ICT推進部会：ICTを活用した魅力ある授業づくり
- 人権・同和教育部会：3年間を見通し、系統立てた人権・同和教育の実践

(3) めざす教職員像の実現に向けた計画的な教職員研修の実施

- ・ めざす教職員像「実践力のある教職員、明るく活力のある教職員、責任感の強い教職員、自主研修に努める教職員、生徒や保護者・地域とともに歩む教職員、生徒のことをよく知る教職員、「チーム国中」を合い言葉に共育・協働の実践に努める教職員」
- ・ 月1回の現職教育全体会の実施
- ・ 日常的な相互授業参観週間の実施
- ・ 研究大会プレ授業、研究大会の公開授業の実施（10月、11月）
- ・ 若年研修、研究推進4部会、団会での情報交換と実践内容の共有

◆研究構想イメージ図



Ⅲ 研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組

1 (国分寺中学校生徒アンケート)

学級では安心して自分の意見を言うことができますか。

指標 「①思う+②どちらかといえば思う」の合計



指標の達成に向けた実践

- (1) 「国中協同学習」のスタンダードとして、全校コの字型座席配置で、生徒のつぶやきを拾って授業を展開できるようにしている。また、授業開始5分以内と5分に1回程度のペースでペア活動を行うこと、グループ活動も多く取り入れ、学び合う集団づくりすることを意識している。参考書籍を全教員に配布し、国中協同学習について共通理解を行った。



図1 男女市松のコの字型座席



図2 男女でのペア活動



図3 3～4人のグループ活動

- (2) 生徒が安心して自分の意見が言える雰囲気づくりやなかまづくりを推進するために、学級会の実践を行った。協同学習を長年実践していた元校長先生を指導者にお呼びし、公開授業を実施した。生徒の実態に応じた育みたい生徒像を教員が共通理解すること、生徒自身が話し合いたいと感じる議題にするための手立てを工夫すること、3年間を見通して継続実践をしていくことが大切だと指導していただいた。

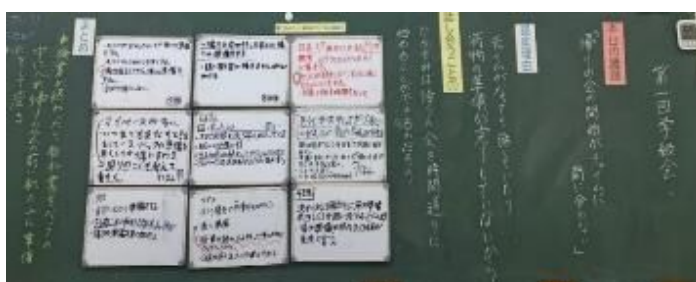


図4 「学び合いセット」としてホワイトボードを教室に常備し、すぐ使えるようにしている。



図5 司会者の生徒が学級会を進める様子。出てきた意見を視覚的にわかりやすく分類している。

2 (国分寺中学校生徒アンケート)

普段の授業では、学級と友達との間で話し合う活動をよく行っていると思いますか。

指標「①思う+②どちらかといえば思う」の合計

6月調査
94.0%

目標値
95.0%

11月調査
91.4%

指標の達成に向けた実践

- (1) 道徳の授業では、ねらいに迫るための決め手となる発問を「ジャンプ課題」とし、実践を積み重ねた。ジャンプ課題を設定することで、自分で深く「考え」友だちと「議論」する必要性が出てくると考えた。また、学期に1回行ったローテーション道徳では、教員が3人ずつのグループに分かれ、教材研究をし、お互いの授業を参観し、生徒の見取りを行い、授業を改善しながら実施した。



図6 全体共有、ペア、グループ活動など学習形態を授業展開に応じて工夫している。

- (2) 国語の授業では、「和歌の魅力を語ろう」というジャンプ課題でグループ活動を実施した。各班が鑑賞する和歌を決め、調べる方法、まとめる方法を選択した。劇、プレゼン、イラストなどでアイデアあふれる発表会となった。振り返りでは、生徒が自分の言葉で和歌の魅力を表現していた。

	学習内容・活動	学習形態
共有課題	記号文の和歌の魅力を語り合う。	
1	・和歌を鑑賞する。 ・鑑賞に見つけた和歌の魅力を語り合う。	ペア 全体
課題の追究	・和歌を調べるための形式を確立する。 ・時代背景、作者の生い立ち、心情画、言葉の意味、場面、自分の体験との共通点等。	ペア 全体
ジャンプ課題	和歌の魅力を語ろう。	
3	・和歌について調べる。(タブレット、辞書、国語資料等) ・どのような方法で紹介するのが良いか考える。(イラスト、録音、PQRづくり、物語作り、等)	グループ
まとめ振り返り等	・組ごとに、どの和歌をどのように紹介するのか、どのくらい準備が進んだかなどの中間発表をする。	グループ 全体

図7 授業の流れを示した「授業デザイン」



図8 生徒が効果的な伝え方を選択し、いきいきと発表した発表会の様子

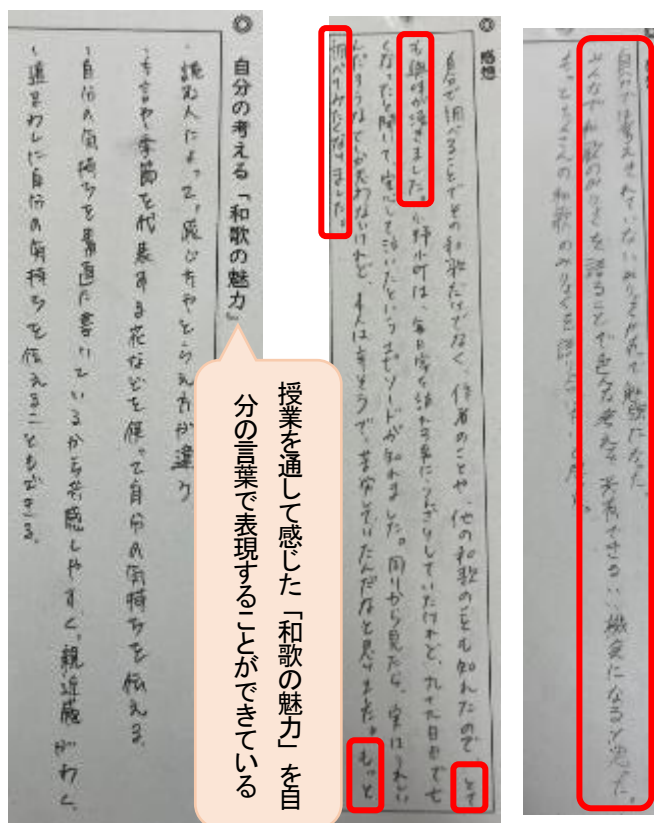


図9 学び合うことの効果を感じている生徒の感想

3 (国分寺中学校生徒アンケート)

学級の友だちと話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていますか。

指標 「①思う+②どちらかといえば思う」の合計



指標の達成に向けた実践

- (1) 社会の公開授業では、資料をもとに、自分の考えを記入した後、インタビュー対話の実践を行った。インタビュー対話は一対一で行い、自分と同じ意見の人と違う意見の人と行うなどのルールを伝えて実施した。

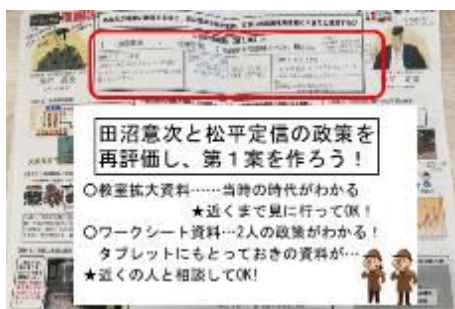


図10 対話を深めるために、自分が選択した資料と向き合い、自分の意見を持たせ、表現させる様子。

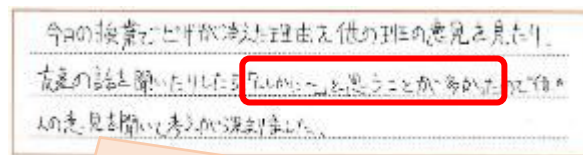
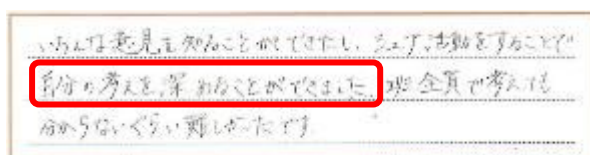


図11 インタビュー対話で協働の学びを行ったうえで、個の学びに戻すワークシートの工夫

- (2) 理科の授業では、ジャンプ課題を提示し、班で話し合いを行った後、生徒が自由に学び合える「シェアタイム」を行った。ペアやグループでの学び合いに限界があることや、個別最適な学びを提供したいという狙いから実施した。ジャンプ課題を解決したいという意欲から、一人ひとりが自分にあつた方法で課題と向き合い、解決しようとしている姿が見られた。



図12 シェアタイムでは、複数で話し合ったり、もう一度実験したりと自分に合った学び方を選んでた。



一人で解決できないジャンプ課題を学び合うことで解決しようとし、考えが深まったという生徒の感想

IV 研究の成果と課題

市内の研究大会での公開授業や香川の教育づくり発表会で国中協同学習の実践について報告できたことは研究を深める貴重な機会となった。教材研究や模擬授業、プレ授業など、教員同士で授業について話し合う機会がもて、お互いに授業を参観し合うこともできた。また、県外の先進校視察に継続的に行くことで、協同学習を実践推進する教員が育ってきている。

これからも、普段から授業を気軽に参観し合える教員のなかまづくり、国中協同学習の共通理解の機会を定期的にもち、だれひとり取り残さない学び合いの実践に努めたい。

◆研究の成果について

【公開授業参観者のアンケート、授業協議記録より】

- ・生徒から様々な意見が積極的に出されていてよかった。公開授業だけでなく、普段から生徒同士が関わり合えるなかまづくりがよくできていると感じた。
- ・普段の地道な積み重ねが見えた授業だった。先生と生徒の距離感、生徒同士の関わり、学びへの態度が非常に良いと思った。子どもの学びをサポートする教員の立ち位置が非常に勉強になった。
- ・生徒が気兼ねなく発言できる雰囲気がとても良いと思った。また、声の大きい生徒の意見だけでなく、小さなつぶやきも大事にすることも大切だと思った。
- ・同じ教科の教員だけでなく、他教科の教員も教材研究や模擬授業に関わっていたことで、生徒目線の意見が出て授業デザインに生かせていた。教員同士のつながりも深まるのでよい取組だと思う。
- ・学級会では、生徒が中心になって話し合いが進められていた。議題が難しいように感じたが、話し合いが始まると活発に意見を出し合っていたので、慣れているんだなと感じた。

◆研究の課題について

【指導内容、授業協議記録より】

- ①グループの形がいいのか、コの字型座席がいいのか、授業の展開によって工夫が必要。
→ペア活動や全体交流する時にはコの字型座席が効果的だと感じる。ただ、グループの形でもコの字型でも個の学びが成り立つようにする教員の意識と、意図的な声掛けが必要。
- ②参観したグループは交流がうまくできておらず、学力的にもかなり厳しいグループのようだった。
→無作為に決められた3、4人グループでは、確かに学び合いに限界がある場合がある。シェアタイムやインタビュー対話のように、個別最適な学びを生徒が選択できるような取組が日常的に実践できるように研究したい。
- ③ワークシートに意見を書いているのに、しゃべらない生徒がいてうまく交流できていなかった。
→だれひとり取り残さない学び合いを達成するために、学びに向かえていない生徒への対応とともに、自分の意見を伝えることが難しい生徒や、学びが滞っているペア、グループへの指導の在り方について共通理解したうえで実践したい。
- ④ジャンプ課題の設定について、全員の生徒が深く考える内容で、あきらめずに取り組もうとする魅力のあるもの適度なレベルの課題を考えることが難しい。
→ジャンプ課題の設定をする授業を実践し、お互いに参観し合うことで研究が深まる。まずはやってみるところから始め、教科を問わず参観し、研究を深めたい。